書き手 スウィフト

メービウスの帯

渡邊 孔二 著

山口書店

メービウスの帯

——書き手スウィフト——

渡邊孔二 著

山 口 書 店

著者紹介

渡 邊 孔 二 （わたなべ　こうじ）

1937年生まれ。1961年3月神戸大学文学部文学科（英米文学専攻）卒業。1963年3月大阪大学大学院文学研究科修士課程（英米文学専攻）修了。高知女子大学講師，神戸大学講師，助教授，教授を経て，1987年4月から甲南大学教授。1990年4～9月，ウォリック大学ヴィジティング・フェロー。

〔著　書〕『スウィフトの断想』（山口書店）
〔編著書〕『ジョージ・オーウェル』（山口書店）
〔編訳書〕『想像の翼――スウィフトの科学と詩』（山口書店）
〔監訳書〕『ジョン・シャーマン』（吾妻書房）

メービウスの帯
――書き手スウィフト――

定価3800円（本体3689円）

1991年11月10日　発行
著　者　渡 邊 孔 二
発行者　三 宮 庄 二
印刷所　（株）太 洋 社
発行所　株式会社　山 口 書 店
〒606　京都市左京区一乗寺築田町72
電話075(781)6121　FAX075(705)2003

© 1991 ISBN4-8411-0836-X　C3098

目　次

序　書き手スウィフトの回り道 …… 1
I　『桶物語』のソースをめぐって ……17
II　ガリヴァのフェルマータ ……55
III　『控え目な提案』――ひとつの読み方―― ……227
付録 I　スウィフトの自伝――事実と虚構の狭間―― ……311
付録 II　漱石のスウィフト論 ……351
あとがき ……391

序　書き手スウィフトの回り道

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com

序　書き手スウィフトの回り道

いつ頃どのようにして Jonathan Swift (1667-1745) は読者の前に姿を現わしたのだろうか。

現存しているスウィフトの書簡を調べたかぎりでいうと，彼が自分の書き物を出版してもらうために出した最初の書簡は 1692 年 2 月 14 日付（当時の暦では 1691 年 2 月 14 日付）のものである。[1] St. Valentine's Day を彼が意識していたかどうか不明だが，わざわざこの日を選んで書簡を出したとも考えられる。のちほど，1708 年 'Almanac-maker' John Partridge (別名 John Hewson, 1644-1715) 揶揄に際して 4 月 1 日つまり All Fools' Day を利用した[2] スウィフトからすると，後述するように複雑な思いがあったとはいえ，書き手として世に出ることを認めたはじめての書簡を送付する日を意図的に設定したことは十分推察される。この書簡の宛先は 'the Athenian Society' になっている。

「アテネ協会」というクラブ名を顧みる人は現在ではほとんどいないようだが，このクラブは，1662 年チャールズ II 世の勅許がおりて発足した新科学振興団体の The Royal Society of London を意識して，1689 年「学問一般の奨励」を目指してつくられていた。名称もよく似ているし，目標に掲げていたこともあまり大差ないのだが，両者はいくつかの点で大いに異なっていた。「王立協会」の初代協会長が伯爵 William Brouncker (? 1620-84) であったのに対して，「アテネ協会」の中心人物は，貴族でも新科学者でもなく，書籍販売業と書籍出版業に携わっていた John Dunton (1659-1733) であった。ダントンはホイッグ党員であっ

ただけでなく，非国教徒たちとも深いつながりがあり，[3] しかも自ら雑文を書くいわゆる 'Hack' でもあった。1692 年 2 月の時点でスウィフトがどの程度ダントンのことを知っていたかは不明だが，のちほどスウィフトはダントンのことをからかっている。グラッブ・ストリートの三文文士に褒められる「すぐれた書店主で町の名士であるジョン・ダントン氏」なる表現を *A Tale of a Tub* 第 1 章「序論」のなかで用い，ダントンを 'Hacks' の代表格に祭り上げている。[4] 『桶物語』を書いていたころのスウィフトにダントンを利用する意図があったことは確かである。『桶物語』の込み入った構成にダントンの著作の影響をみる研究者さえいる。[5] ダントンをスウィフトが利用している書き物は『桶物語』だけではない。ダントンの同類にすることで Bishop of Salisbury であった歴史家，神学者の Gilbert Burnet (1643-1715) に軽蔑を表明することに成功している。[6] また，スコットランドの貴族を侮辱したり，スコットランドとイングランドの合併について論じながらアン女王に不敬の言葉を浴びせたという理由で作者探がしに 300 ポンドの懸賞金を出す旨の女王布告が出されたことでも有名なパンフレット *The Publick Spirit of the Whigs* (1714) のなかでも，「うるさい蜂」であるホイッグ党員を代表する「主要な書き手」としてダントンの名前を挙げている。[7] アテネ協会員としてはダントンのほかに，ダントンの義弟で非国教派聖職者でもあった詩人 Samuel Wesley (1662-1735),[8] *History of the Athenian Society* (1692) の著者で *The Dunciad*, Book III にも出てくる (173 行目) 批評家で理神論者の Charles Gildon (1665-1724) がいたが，ギルドンはスウィフトからみると 'anti-Christian' であった。[9]

ダントン，ウェズレイ，ギルドンなどがつくっていたのがアテネ協会であるがこの協会は王立協会と違って，協会員の氏名をまったく公表しなかった。この方針はダントンがアテネ協会に対する世間の信用を考慮して決定したと考えられるが，書籍販売業者や書籍出版業者の間では，

アテネ協会にどういう人物がいたかはいわば「公然の秘密」であった。[10] そのために，ダントンとしては信用獲得のため，世間で信用されている人物を抱き込む必要があったのだが，ダントンが狙った人物のひとりに，当時スウィフトが秘書として仕えていたSir William Temple（1628—99）がいた。テンプルとダントンの関係は，アテネ協会のことだけではなく英国史の出版をめぐってその後も数年間続くことになるが，彼らの関係の経緯をみるかぎり，テンプルがダントンに利用されていたというべきである。[11]

ところでアテネ協会は，王立協会が1665年3月6日発行した協会の月刊誌 *The Philosophical Transactions* を模倣するかのように，1691年3月17日に協会ジャーナル *Athenian Gazette*（のちほど *Athenian Mercury, Athenian Oracle* と改名）の創刊号を発行し，1697年6月14日まで原則として週2回出した。このジャーナルは，Richard Steeleが中心になって，週3回発行した *The Tatler*（1709年4月12日—1711年1月2日）の先がけとなった。このジャーナルには読者からの 'all the most Nice and Curious Questions' に答えるコラムがあったが，読者からの質問の多くは，「'eunuchs' はどうして痛風にかからないのでしょうか」とか「'witches' はどうして身体を縮めて小さな鍵穴を通り抜けることができるのでしょうか」といった「奇問・珍問」の類であった。[12] このジャーナルは数か月単位で既刊号をまとめて装釘本にされていたが，スウィフトがアテネ協会に書簡を送った1692年2月14日の時点で装釘本は4巻できていた。

スウィフトがアテネ協会に送った書簡の発信場所はMoor Parkになっている。ムア・パークはいうまでもなく，Surrey州Farnhamにあったテンプルの邸宅である。当時そこに住んでいたスウィフトからすれば当然の発信場所であるが，無名のスウィフトからすると，発信場所がムア・パークであることからアテネ協会の中心人物ダントンにテンプルと

の関係を誇示できる効果があった。この書簡を読むと，次のような背景的事情がわかる。

1691年アイルランドにいたときはアテネ協会について「いいかげんな」情報を得て，当世風の新しい「愚かな企て」がまたひとつ増えたと思っていたスウィフトが同じ年の12月オックスフォードにいた従兄のThomas Swift (1665-1752) を訪ねたとき「そこにいた非常に学識のある人」（おそらくトーマス・スウィフトのことであろう）からアテネ協会について聞き，はじめて『アテネ・ガゼット』の装釘本を2，3冊見せられた。次いでムア・パークでアテネ協会を称えるテンプルから（テンプルという名前は書簡では伏せられているがスウィフトがこの書簡を書く2か月ほど前テンプルは『アテネ・ガゼット』に寄稿していて，[13] ダントンには伏せ字のところにテンプルが入ることは容易にわかった），それまでに出版されていた装釘本4巻をすべて見せられた。その結果，スウィフトはアテネ協会を称える頌詩を書くことになった。頌詩を書き上げてそれを「非常に博識で名誉ある人」つまりテンプルと「数人のすぐれた知り合い」に見せたところ，彼らはこの頌詩がアテネ協会員に評価されることを述べて，『アテネ・ガゼット』の次の装釘本を飾る詩として印刷してもらってはどうかとスウィフトに勧めた。スウィフトは，すぐれた文学作品を飾ってきた推賞詩を思い出しながら，この頌詩を『アテネ・ガゼット』第5巻の付録として印刷することを要求したのち，アテネ協会員による校閲訂正も認めている。

この書簡からも当時のスウィフトの複雑な気持ちが伝わってくる。当時流行の「愚かな企て」である『アテネ・ガゼット』をあまり評価していないにもかかわらず，テンプルの勧めでアテネ協会を称える頌詩を心ならずも書き，書き手としての自負心を前面に押し出さずにその頌詩を活字にすることをアテネ協会に依頼している。この書簡で言及されている頌詩というのはこの書簡に同封されていた *Ode to the Athenian Soci-*

ety で，1692 年 4 月 1 日「万愚節」に出版されたと推定される。[14]

この『アテネ協会に捧げる頌詩』自体も当時のスウィフトの複雑な気持ちをよく表わしている。スウィフトはまず「学識の獲得者」であるアテネ協会をほめ称える「詩神鳩」を登場させ，スウィフトという書き手がすでに *Ode to the King* なる頌詩を前年つまり 1691 年に執筆していることを知らせ，その『王に捧げる頌詩』を「生を受けた最初の木」「雷，嵐，雨の後に姿を現わした最初の樹木」である「月桂樹の小枝」に譬えながら自分が書いた頌詩への自負をのぞかせたのち，そうした頌詩の書き手としてのスウィフトはアテネ協会に賛辞を呈するのにふさわしい旨を伝えている（第 1，2 連）のだが，第 3 連になると自負心を表わす語句は消え，自己卑下を表わす語句が頻出している。「汝ら世に知られざる偉大なる者たち」つまりアテネ協会員に比べると，自分は「若い詩人」で，アテネ協会賛美の詩を書くことは「荒々しい遠出」にも相当する。「若い処女（のような）詩神」に誘われて判断力もないのに，迷いや悩みに応えてくれる「強い光」に従って「未知なる路」へと「身のほど知らぬ散策」に出たことに対して許しを乞い，アテネ協会員という「才知を有する者」からすると，自分はアテネ協会員を取り囲んでいる「うるさい蠅」の一匹にすぎないと続けている。「作詩の願い止み難く」愚かにも称賛賛美の言葉を吐き出している「善良なる愚者」の自分に「憐れみ」を与えてほしいとかぎりなく謙っている。

ところが，第 4，5 連になると，のちほどの諷刺家スウィフトを確証するかのように，アテネ協会を非難する「才人面した」「当代の無神論者」，「下らぬ道理を新しい学説とみなす」一派への攻撃に転じている。第 6 連になるとまた「心満たない自分」に対する卑下に向かい，「弱さと無知」のみ有していて，「すばらしい真理」が見えないことを嘆く一方で，その嘆きを利用しながらアテネ協会への賛辞を繰り返している。そしてアテネ協会が「今の世の広がり行く誤謬と堕落，誤まった判断と見

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

解」を見極める力を有していることを称えている。第7連では，「世間に知られる愚かしさ」と無縁であるアテネ協会を称えるのに「名声のむなしさ」をもち出しているのだが，ここでは，テンプルの助力で名声を得たいと望んでいたスウィフトの揺れ動く気持ちが重ねられている。

Were I to form a regular *Thought of Fame,*
Which is perhaps as hard t'imagine right
As to paint Eccho to the Sight:
I would not draw th' *Idea* from an empty Name;
Because, alas, when we all dye
Careless and Ignorant Posterity,
Although they praise the Learning and the Wit,
And tho' the Title seems to show
The Name and Man, by whom the Book was writ,
Yet how shall they be brought to know
Whether that very Name was *He, or You, or I* ?[15]

自負心と自信のなさと名声願望が「名声のむなしさ」をめぐって渦巻いている。この詩の末尾にスウィフトは「ジョナサン・スウィフト」と署名している。1，2の作品を除いて匿名でとおしたのちほどのスウィフトとは鮮やかな対照をみせている。「こだまに色づけする」ことに譬えられている名声は，理性を「世評」に支配されて得られる一時的なものでも，現世の「水彩絵具」で塗りたくられるものでもなく，「万事の帰す処」にしかないとみなしながらもスウィフトはこの詩に署名している。

第8連，第9連でまた，読者や批評家への批判をとおしてアテネ協会を間接的に賛美しているのだが，第10連に入ると「賛美の詩神」への批判がはじまる。自分は「賛美の詩神」に従ったため，批判力を失い「万

物の美化」に向かったが，自分には「反逆を好む」傾向があり，「賛美の詩神」ではなく「反逆の詩神」に従いたい気質があることをほのめかし，『アテネ・ガゼット』の読者である「女性」の「傲慢」「残酷」「虚栄」を増大させたことでアテネ協会に苦言を呈しているとともに，その直後でアテネ協会が男性読者を「高きところ」に昇らせたことを称えていて，この第10連には，批判と称賛が混在している。

第11連に入ると，「悲しい憂うつな詩神」を登場させ，「学問と才知」で身を包んだアテネ協会も「偉大なる王にして征服者」同様，「つかの間のはかなきもの」で「人の世の利害，愚行，悪習」に負けることであろうと語る。「如何なる栄華」も時が過ぎてゆくにつれて衰えをみせ，ついには「空しき形骸」になる運命にあると述べる。

There is a Noon-tide in our Lives
Which still the sooner it arrives,
Altho' we boast our *Winter-Sun looks bright*,
And foolishly are glad to see it at it's height
Yet so much sooner comes the long and gloomy Night.
No Conquest ever yet begun
And by one mighty Hero carried to it's height
E'er flourish't under a Successor or a Son;
It lost some mighty Pieces thro' all hands it past
And vanisht to an *empty Title in the Last*.[16]

最終連である第12連で，アテネ協会もまた「非難，衒学，傲慢」を身につけた「無教養の輩」に敗北するであろうが，アテネ協会が存在し，才知をとおして読者に「幸せの広がり」を贈ってきた証跡は消えることがない，なぜならば，名前を公表しなかったアテネ協会員のように「名も

なく生きて死んだ人たちこそ聖なる名声表に刻まれる英雄」なのだからとふたたびスウィフト自身の名声への複雑な気持ちをのぞかせながら，307行からなる『アテネ協会に捧げる頌詩』を結んでいる。

スウィフトが予言したように『アテネ・ガゼット』は短命で既述したとおり6年余りのちの1697年6月14日には最終号を出し，その後蘇えることはなかった。そして，名声を「後世の人びと」に残すこともできなかった。現在ではスウィフトが『アテネ協会に捧げる頌詩』を載せたことで思い出されるくらいである。それに対して，皮肉なことだが，この頌詩で複雑な思いをからませて名声のむなしさを繰り返し述べているスウィフトはその後「善良なる愚者」にも「悪しき愚者」にも知られるようになった。しかし，それは「英雄」を称える頌詩の書き手としてではない。さまざまな仮面をつけた書き手としてである。

『アテネ協会に捧げる頌詩』について当時のスウィフト自身がどう思っていたかは従兄のトーマス・スウィフトに宛て出した1692年5月3日付の便り[17]から推察することができる。この便りのなかで，スウィフトはピンダロス風頌詩執筆の苦心と自作への愛しさを告白している。1週間で二つのスタンザしか書けないときもあったし，自作の頌詩を「100回」も読んだことがあったスウィフトは『アテネ協会に捧げる頌詩』を1週間で書き，2日間推敲して仕上げている。この頌詩が12連からなり，1連が30行以上のものもあるが，すべて20行以上（実際には第12連のみ16行）であることを知らせたのち，この詩は評判がよく，『アテネ・ガゼット』の第5巻を飾る詩として採用された旨を書いている。さらに，「書店主」つまりダントンがスウィフトに便りを認め，そのなかで「もうひとりの紳士」つまりチャールズ・ギルトンが『アテネ協会史』にこの頌詩の一節を引用していることも知らせている。これは，この頌詩の最終連最後の3行が『アテネ協会史』で引用されたことに言及したものである。従兄のトーマスに便りを書きながら，スウィフトはThomas Sprat

(1635-1713) の *History of the Royal Society* (1667) に Abraham Cowley (1618-67) の *Ode to the Royal Society* が掲載されていたことを想起していたのかもしれない。

ところで，従兄のトーマスに出した便りのなかにはわれわれにさまざまなことを想起させる微妙な表現が少なくとも3か所ある。ダントンのことを 'the fellow' と表現しているうえに，『アテネ協会に捧げる頌詩』が活字になっただけでなく『アテネ協会史』で引用されたことを知って嬉しかったことを伝えるのにスウィフトは 'perhaps I was in a good humor all the week' と書いている。また，この詩を書くきっかけを伝えるのに 'at least Sir William Temple speaking to me so much in their Praise made me zealous for their cause' と書いている。のちほどスウィフトのことを 'a Country Gentleman' と書き，『アテネ協会に捧げる頌詩』を 'an ingenious Poem' と評した[18] ダントンがアテネ協会の中心人物であったことをスウィフトが知っていたことはこの便りの表現からも明らかで，ダントンのことを軽蔑して「例の男」と表現している。次に，この頌詩が印刷されただけでなく『アテネ協会史』に掲載されていることを知って喜こんでいることを伝えるときに，「ことによると」といった可能性五分五分を示唆する副詞をわざわざ付けて表現しており，従兄へのてれ隠しとはいささか異なる心情を吐露している。さらに，ダントンへの言及と自らの複雑な心情に深くかかわっているかのように，この詩を書いた動機として，アテネ協会に関心を寄せていたテンプルが介在していたことを明確に伝えている。

テンプルが当時の「現代式」考案物に批判的で，「古代」から受け継がれてきていた諸々の前兆，魔力，自然の不思議などアテネ協会の『アテネ・ガゼット』に掲載された非科学的なものに興味があることを知っていたスウィフトがダントンへの低い評価に目をつぶり，テンプルに気に入られることを優先させて「愚かな企て」とみなしていたアテネ協会を

称える頌詩を敢えて書いたのであって，この頌詩を書いた動機としてスウィフト自身の「詩人としての誠実さ」を認めることはできない。確かに，この頌詩を執筆していたときスウィフトが『アテネ・ガゼット』の読者たち，つまり，「部屋係の女中」「嘲笑好きの人」「信じやすい地方の紳士」[19] などにも配慮を怠たっていないことはこの頌詩の詩句からも明らかであるが，スウィフトがまず念頭においていた読者はテンプルであった。この頌詩のなかで呼びかけている「汝ら，知られざる偉大なる人たち」の筆頭にテンプルが存在していたことを従兄トーマスへの便りは伝えてくれている。

書き手としての誠実さはなによりも書く対象への偽らざる真摯な執筆願望を要求するであろうが，そうした要求を無視して『アテネ協会に捧げる頌詩』を書いた，書き手としての誠実さへのスウィフトの背信行為の代償は大きかった。スウィフトに偏見をもっていたSamuel Johnsonが紹介した[20] ために今日でもこの頌詩を論じるときほとんど必ずといってよいくらいもち出されるJohn Drydenの「簡潔な批評」[21]（ドライデンは「スウィフト，君は詩人になれない」といわずに「君は賛辞を書く詩人にはなれない」というべきであったと思われるが）をはじめとして，この頌詩への評価はきわめて低い。スウィフトの書き物のなかで「最悪」と評している評家さえいる。[22] ドライデンを待つまでもなく，この頌詩のことはスウィフト自身が一番良く知っていた。この頌詩はロンドンで1710年，1728年，1745年，ダブリンで1725年，アテネ協会関係の雑誌やスウィフトの雑文集に再録されたが，スウィフト自身は生前，この頌詩を自分が関係したいかなる作品集にも再録していない。[23] 書き手としてのアイデンティティを確認することを敢えてせずにいわば'hack writer'として世間に姿を現わしたことを彼自身がのちほど確認したためであって，ドライデンの発言のためだけではない。彼自身とかかわる「詩神鳩」「若い処女（のような）詩神」「蠅」「善良なる愚者」「反逆の

詩神」「悲しい憂うつな詩神」と目まぐるしく変わっている自己表白の表現が象徴しているように，スウィフトはテンプルに「雇われた」書き手としてアテネ協会を称えながらも作詩の過程においてすでに自問しつづけていたのである。自分が「誠実さ」から創作したい詩とテンプルが好む頌詩との隔たりを感じながらも，テンプルが称えるアテネ協会を賛美した。その結果は，曖昧模糊とした感情ばかりが表出され，詩人としての素質まで疑われることになった。しかし，そうした詩としての不成功と引き換えに，この詩は計らずもスウィフト自身が自己発見していく跡を記録してくれた。そのことはのちほど，*The Life and Genuine Character of Dr. Swift* や *Verses on the Death of Dr. Swift* において明確な形で現われてくるが，その最もはやい原型がこの『アテネ協会に捧げる頌詩』のなかにある。詩自体の混乱，統一のなさと引き換えにスウィフト自身に自己を見つめ直す機会を提供したのである。自分の才能，素質に合致しない詩形で賛美の詩を書き，諷刺的言及も不完全燃焼のままでのちほどの諷刺詩にみられる特定の対象に諷刺的鋭さを集中させるエネルギーを欠いでいることを誰よりも痛感したのはスウィフト自身であった。賛美すべきものが存在しない対象に対して頌詩を書くという，いわば不毛の大地を耕すことをまるで「雇われた書き手」のように敢えて行なった過去の経験はのちほど『桶物語』で結実したとはいえ，スウィフト自身にとっては，忘却の彼方へ押しやりたい若き日の汚点であった。しかし，それはあくまで過去に対する回想であって，この頌詩を書いていたときのスウィフトの思いではない。頌詩を書いていたときのスウィフトは，テンプルと名声を無視できなかったのである。「死後の名声」への繰り返される言及は現世の肉体という台木に接ぎ木される果実という名声との無縁を感じつつもその果実を求めていることに気づいている彼自身の引き裂かれた自我の投影であった。[24]

のちほど開花していくさまざまな書き手の資質が盛り込まれていると

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com